

妄言

村上 豊

^{たんかし}短歌誌の歌評だけ切り取った「集」を友人から貰った。古い歌誌の作品評である。歌評とはこういうものだ。と大いに啓蒙されたが、これは大結社だから出来ることで、一般的には、歌誌経営上、「お上手、上手」と会員を煽てなければいけないか。本誌のように「鑑賞」となればまた別か。しかし高齢化がすすんでいる現在、例えば送り物に感謝の「ありがとう」さえなかなか書けなくなっている。書くのが苦痛なのだ。

さて、この集の歌評を読もう。誌名を伏せたので作者も評者も伏せるが

今一度上昇するため低く低く降りねばならぬハシディズムの聖歌 酒井日出夫 (一)

「Y」 事実そのものに含まれている戦慄すべき要素、又は詩情に、手を加えずにそのままに置く一行も歌であるとするのは、近代短歌以来尾を曳く一方法であると思うが、この一首の場合、敢えて言うなら「ハシディズムの聖歌」はやはり説明である。ここを理解するか否かによって享受の色合いは変わってくるだろうが、私は、この作品の魅力は四句までにあると思う。息をひそめてささやくような言葉の息遣いに人を誘うものがあるのである。

「M」 低く低く降りた地点にあるものとして「ハシディズム」をたたえているのだろうか。「ハシディズム」は辞書によると、ユダヤ教の神秘主義的革新運動らしい。上昇をきわめあるいつ点を突いた後は、再び上昇するために下降していくほかないという歴史観、文明観、人間観なのだと思う。作者の批評はまぎれもないが現代の思想に添うものであり、概念として手渡される、わかりにくさがつきまとうと思う。

この歌評を読んで、詠者は望外の喜びだったのではないか、と思う。自分の詠んだ一首が、ここまで読まれたのだとなれば例えば好評でなくても、よし。でないか。素材はいま世界を騒がせている宗教とは違い一八世紀に在ったことだが、やはり殺戮や粉砕を手段として採っているのは今も同じでないか。上昇するためでないかと思う。だが国際問題や宗教戦争をあげつらうのではなく、歌評という視点で考えるとき、判らない歌は避けた。その一首を避けたことは、詠者の真摯さを避けたことにならないか。「Y」氏や「M」氏のようにきちんと向かってこそ歌評は生きる。例歌の「ハシディズム」のような外来語が、三

十一音の中にうまく填っているかどうかを突破口にして見つめるのも手掛かりになるのでは？ 避けるべきでない。

陶潜の^{よう}幼を携え室に入る其の楽しみや^{いくぼく}幾許の間 I 氏 (二)

「陶潜の幼」が分らぬので言辞を弄するのをさしひかえるが、凛々しい声調のみでも理屈ヌキで私の胸に浸透した。不遜は承知で言うならば、歌には、時としてかかる感受があってもよからう。「陶潜の幼」の教授を乞う。(I氏は高名歌人である。)

冒頭に宗教を詠った作品を読んだので朝日新聞歌壇のあの人質事件の歌を詠もう。

見て聞いて伝える人の居なければ彼の国の子等の苦悩知らざり	ひじや貞子
人質の家族が泣いて叫べない国のはてにはいつかきた道	梅田 悦子
天秤は望まぬ方に傾いて救えた命帰らぬ命	佐藤 秀一
砂漠より魂あらば帰らなむ父母妻子待つまほろばの国へ	本山実登利

読もう。人質は働き盛りの年齢だった。